Ａ－６

主題	『口腔ケア強化週間』の効果的な実践による職員の意識改革に基づく 誤嚥性肺炎の予防効果について
副題	利用者の QOL を守りたいという職員の思いの実現

キーワード 1	口腔ケア	キーワード 2	肺炎予防	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福）友愛十字会　砧ホーム
発表者（職種）	片平ちえみ（介護職員）、吉岡いずみ（介護職員）
共同研究(実践)者	吉岡いずみ（介護職員）、森岡忍（看護職員）、石原佳子（介護支援専門員）

電　話	０３－３４１６－３１６４	ＦＡＸ	０３－３４１６－３４９４

事業所紹介	砧ホームは、1992 年に開所した特別養護老人ホームです。ショートステイ 4 床を含む 64 床のこぢんまりとした施設で、「せたがやの小さな隠れ家」の愛称で親しまれています。法人理念である「共に生きる」のもと、利用者様の考えを感じ、よりよい生活を創り、地域の皆様と積極的につながる実践を展開しています。

《1．研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、近年、利用者の重度化が進んでおり、平均要介護度は 4.1 前後を推移している。新規入所者も含め嚥下能力が低下している利用者が多く、トロミ剤を使用する状況にある方の割合は 43%で、前年（令和元年）度からも 3%上昇していた。介護職員の間では、「以前より嚥下状態が悪化した利用者が増えている」「食事介助をしてもすぐに痰がらみやむせ込みを起こしてしまい、それが原因の発熱などによって更に ADL が下がっていく悪循環になっている」という実感があった。また重度化した利用者が誤嚥性肺炎によって入院されると、そのまま病院で逝去されるか、回復せず看取りで帰園となるケースが少なくないのが現実であった。

以前より、介護職員の間では「むせ込んでも、看護職員に吸引を依頼すれば何とかなる」という意識が根強くありロ腔ケアの習慣付けの妨げになっていたため、利用者に接する機会の多い介護職員が“誤嚥に対するリスク”への危機意識を高め、口腔ケアによりこれを防ぐという認識と行動をいかに根付かせるかが課題となっていた。そこで、定期的に『口腔ケア強化週間』を設定し啓発活動を行ってきたが、「口腔ケアをしっかりしましょう」や「物品の清潔を保ちましょう」の様に具体性に欠けるスローガンを掲げるだけだったことが、介護職員にとっては「いつやるのか」「どのように行うのか」が各自の判断に委ねられ、均一なケアの実施が難しかったばかりか取り組みの形骸化を招いてしまい、却って口腔ケアを弱化してしまっていた。

《2．研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的：誤嚥性肺炎の発症及びそれによる入院を防ぐこと。

仮説：『口腔ケア強化週間』のテーマを具体化することで、介護職員の口腔ケアに対する認識が高まり、口腔ケアの実施が習慣付けられ、誤嚥性肺炎での入院者を減らすことができるのではないか。

無断転載・複製を禁じます。

《3．具体的な取り組みの内容》

令和２年度の『口腔ケア強化週間』では、「食事中に痰がらみが見られたら、吸引の前にまず落ち着いて口腔ケアを行い、原因となっている痰や食物残渣を除去する。吸引自体も利用者の身体負担となるため最終手段にとどめ、こまめな口腔ケアで口腔内の清潔を保ち、誤嚥性肺炎などの予防に繋げる」という明確なテーマを示し、また新型コロナウイルス感染症にも絡めて「口腔内の衛生を保つことでウイルス感染の予防に繋がること」を資料で示し、その上で「絡んだら、まず……？　口腔ケア！」と毎回同じスローガンを設定して展開することとした。

実施期間：第１回　令和２年５月 18 日～6 月 30 日、第２回　令和２年 10 月 23 日～10 月 29 日、第３回　令和２年　12 月 14 日～12 月 20 日

実施後調査：口腔ケア強化週間実施後、介護職員だけでなく、日常的に利用者と関わる機会を持つ他職種も対象に以下の設問を含むアンケートを実施した。

Q1.期間中、痰などが絡んでいる利用者に対してどう対応したか

Q2.どのような場面で『口腔ケア強化週間』の効果が出ている、または出ていないと感じたか

《4．取り組みの結果》

取り組みを行った令和２年度と前年度（平成 31 年度）との比較で、誤嚥性肺炎で入院した利用者が 57%減少した。また、各週間後のアンケートからは以下に代表する回答が得られた。

A1.「痰がらみが見られたら食事を中止し、口腔ケアを行った」「食事中の痰がらみが多く、頻繁に吸引を行っていた利用者に対し、スポンジブラシで粘稠痰を除去したことで、吸引には至らなかった」

A2.「無理な食事介助をしなくなった」「『すぐに吸引』ではなく『まず口腔ケア』を意識できた」「口腔ケアで痰がらみが改善した事例を目にした」

《5．考察、まとめ》

『口腔ケア強化週間』のテーマを具体的に示すことは、職員の行動レベルでの曖昧さを解消することにつながり、実践に対して職員が新鮮に向き合える状況を作ったと考えられる。また同じスローガンで繰り返し展開したことにより、口腔ケアに向き合う意識や観察の視点の積み重ねが効いて習慣化を容易にし、効果的な実践となって期間後も継続され、結果として誤嚥性肺炎による入院者数を減らすことにつながったのではないかと考えられる。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

「無理なく楽しむ在宅介護シリーズ３　知っておきたい　口腔の働きとケア」(2017)、金澤紀子・千羽富紀子、一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会

口腔ケアによる誤嚥性肺炎予防（歯科学報 105(2):129-137）
https://ir.tdc.ac.jp/irucaa/bitstream/10130/182/1/105_129.pdf（2021 年６月 17 日）

《8．提案と発信》

誤嚥性肺炎を防ぐことは利用者の QOL を守るだけでなく、特にコロナ禍においては医療の逼迫を防ぐ一助となります。施設で口腔ケアを徹底することの重要性とその責任が高まっていると言えるのではないでしょうか。口腔ケアの推進により、福祉と医療を守り抜きましょう。

無断転載・複製を禁じます。